

# 眞の佛教者 乾泰正先生

水 谷 幸 正

(佛敎大学前学長)

いかなる学問においても、学問研究であるからには一定の方向性を予め決めるべきではない、ということとは当然である。したがって佛敎大学における社会福祉研究のありかたは、自由闊達、多種多様にわたり、研究者の関心のおもむくところさまざまである。とはいふものの、佛敎大学の建学の精神からいっても、おのずから佛敎福祉にその特色が出てくることも当然のなりゆきであらう。

このようなことから、佛敎大学は佛敎福祉の研究に特に力を注ぐべきであるという念願のもとに、昭和四十七年、当時、学長であった藤原了然先生、社会福祉学科主任教授の秦隆眞先生、秦先生の支柱ともいふべき上田千秋先生と相談して「佛敎社会事業研究所」を設立し、秦先生が初代所長に就任された。爾來、恒川武敏先生、久保田治先生、孝橋正一先生、上田千秋先生、そしていまの柴田善守先生へと歴代所長によって、日本における佛敎福祉研究の中心的存在になっっていることは周知のところである。

実のところ、この十八年間、この佛敎社会事業研究所を支えてきたのは、ほかならぬ乾泰正先生なのである。まさに知る人ぞ知る。とくに洛陽の紙価を高らしめている『佛敎福祉』の発刊は、乾先生なかりせばの感一入大なるものがある。先生は社会福祉学の専門的な研究者でもなければ、各方面の社会事業について実践してこられた方でもない。しかし、そのお人がらが、まさに佛敎福祉そのものである。「いつもにこにこ、心やさしく、ひかえめに」という標語をつくって、自分自身への戒めとし、また人びともそのことを説いている昨今の私であるが、この言葉を述べるとき

にすぐ頭に想い浮かぶお人からの一人が乾先生でもある。とにかく先生はひかえめであり、黙々と佛教社会事業研究の縁の下の力持ちになって頂いていた。

堂々の論陣をはるのも研究所としては必要であろう。ときにはスタンドプレーも必要かもしれない。しかし社会福祉なかんづく佛教福祉なるものは、やはり下坐行を本旨とする。下坐行とはいうまでもなく菩薩行である。菩薩行の思想的根拠の解明が佛教学であり、そのことが佛教福祉の理論的背景にもなる。そしてその菩薩行の実践者を佛教者というのである。私自身一人の僧侶であるが、はたして佛教者といえるかどうか、いつも反省している。乾先生はまさに現代を代表する佛教者であった。

いま乾先生を偲ぶにあたって、前記の秦、恒川、久保田先生をはじめ、上田官治先生、芝崎真悟先生という先逝の諸先生の遺徳があれこれと想いおこされる。このような先生がたのお力添えのおかげによって佛教社会事業研究所が運営されてきたのであるが、研究所のことだけに一貫して力を注がれたのは乾先生をほかにおいてない。乾先生なきあと、研究所がどうなるが一沫の危惧がないでもない。研究所の中に滲み込んでいる乾先生のすばらしいお人からの雰囲気がいっいつまでも香りを残して、さらによりよい研究所になることを念願し、とりとめのない末文ながら遺徳を偲んでやまない。

乾先生、冀くば還来穢国度人天し無際限の慈悲を垂れ給わんこと。